

児童生徒理解 ～いじめを生じさせない学級づくり～

平成25年7月31日(水)

高知大学博士(カウンセリング 科学)鹿嶋 真弓

(1) 児童生徒理解

Q, どちらに目がいきますか？

<認知的不協和>

人間の脳の癖として欠けているほうに目がいく傾向がある。

このような癖があることを知っていることが大事

児童生徒にたとえると

問題行動に注目しすぎる

できていることに注目する。
できたことをほめる。

子どもが望ましい行動をしている時にこそ、教師がしっかりとかわる。

(2) いじめのメカニズムを考える

いじめ対策 (学級集団の体質改善)

- ・ 学級集団の安定性、規範意識、向社会性を育てる。
- ・ 建設的に対処するスキルをつける。
- ・ 問題発生時ではなく、予防的な取り組みの実践を日頃から行う。

学級集団で起こるいじめ問題

学級集団の状態や、児童生徒の関わり合いの質の影響を大きく受ける

いじめの行動の抑制力 (児童生徒の充実感向上)

- ・ 教師の受容性
教師が子どものことを理解すること。
- ・ 友人関係の質
悩みを打ち明けられる人間関係をつくる。友だちと深い話ができる。

(3) 互いに高めあう学級集団づくり

教師にできること

児童生徒同士の絆を結ぶ学級経営

- ★ はじめの2ヶ月にやると効果的なこと
 - ・ 二者関係をつくる(最初は教師が一ひとりとつながる、次に子どもと子どもをつなげる)
 - ・ 四人組の関係づくり
 - ・ 班での関係づくり
- ★ パーソナリティを育てる
 - ・ 「友だちのいいところを認められる人は成長するよ。」ということを教えていく。友だちをモデルにするので、お互いが高まりあい、学級集団として成長していく。
- ★ 満足感・充実感を実感できる集団体験学習
 - ・ 授業をいかにおもしろいものにするか。子どもが家に帰って、保護者に話したくなるような課題を準備しておく。
 - ・ 学校生活の質の保証
 - ・ 学級集団の育成の重要性
 - ・ ソーシャルスキルの学習の必要性

情緒の安定・モチベーションの向上・モデル学習

学校に求められること

学校内の全教員による連携した組織対応

- ★ 学級集団への関わり方
 - ・ 問題発生時ではなく、日頃から定期的に学級集団の体質改善に学校として取り組む。
- ★ 学校体制のウィークポイント
 - ・ 各取組が教師個々に任されている。担任ひとりでの対応の限界⇒どんなに熱心に教育実践を行っていても、すべての児童生徒を理解し、対応することは難しい。

【校内教員組織での対応】

- ・ 何が起きているのか : アセスメントツールの共有化
- ・ 具体的にどう動くのか : プログラムの共有化
- ※ アセスメントツール(Q-U, あったかアンケート等)の結果を共有する。

一貫した教育相談の体制を構築しておくことが大切

【受講者の感想】

- ・ 具体例を示してくださり、とてもわかりやすかった。自分が生徒とかわかる中で、できていることよりできていないことに目がいついていくことに気付くことができた。これからの実践につなげていきたい。
- ・ 事象が起こってからの対応になりがちだが、校内で予防的に取り組んでいくことが必要だと感じた。
- ・ 考え方も重要ですが、鹿嶋先生の話し方にすごく惹かれました。そのような人間性や技術の両面について、日々研鑽していきたい。



「高知市立小中特別支援学校 研究主任研修会」

平成25年5月31日(金)

「思考力・判断力・表現力を育む授業づくり」～校内研修を通して～

講師：大阪教育大学 木原 俊行 教授



校内研修の普遍的価値は？

- ① 「その学校の教師に特に求められる」専門性を磨き、子どもの成長に資する
- ② 同僚とのコミュニケーションや協力が増える（同僚との学び合いは不可欠）

校内研修推進のポイント

- ① 1学期に授業研究会を実施できることをスタンダードに！
事後協議の内容が多様になるような授業を
- ② さまざまなグループによる授業研究を！
(例) **グループ討議→要点を3行で書く→発表・全体で共有**
- ③ 長期休業中に実践研究の形成的評価を！
(例) **ミニポスターセッション**（経験年数に関係なく、多くのアイデアに触れられる）
全員A4用紙1枚に、1学期の取組をまとめ、A3に拡大して掲示
→1学期の取組を出し合って総整理し、2学期の取組を宣言する
実践研究における問題解決の答えは仲間の中にある！

研究授業では
その人なりの
チャレンジが
大切！



あなたの学校の事後協議会に あてはまるものはありますか？

- ☐ 重い沈黙が続く
- ☐ 授業者に対する個人攻撃が激しい
- ☐ 特定の発言者が長々と話す
- ☐ いろいろな意見はで出るが、まとまりがない
- ☐ 前回の協議会とのつながりがうすい



担当する教科が異なっても授業について語り合える視点を提案しよう

意見やアイデアを出してもらうために・・・

- (例) 色分けした付箋に項目別に意見を書く
青・・・きめ細かな指導について
黄・・・評価について
桃・・・その他

「振り返り」と改善案を具体的に構想するために・・・

- (例) 研究授業について気がついたことと、自分ならどうするかを考える、さらに自分自身の授業改善について記入する「自分化シート」を取り入れる。

最も大切なのは、各人の「振り返り」と改善案の具体的な構想

緊張感のある事後協議会の実現は「司会力」にかかる

- ・ 参加型
- ・ 振り返りと決意表明タイムを確保
- ・ 笑いとおドリブがあり、テンポのよい司会・進行

授業研究の連続発展を大切にする

- (例) 前回の授業研究の討議の中から、ポイントを絞って提示し、つながりのある研究討議にしてい

部会を工夫する

- (例) 少人数指導、ICT活用、合科的指導等の専門部会を設定し、その配属は本人の希望で決める

☆ 校内授業研究が熟してきたら・・・

教育委員会や他校と連携をして、多様な意見を参考にしよう

☆ 研究発表会は拡大授業研究として位置づけよう

- ・ 研究発表会のプログラムの工夫
(例) 各人の「こだわり」とそのアピール場面の設定
隣の学校等とのパートナーシップの確立
全員参加の協議会
協議会と全体会の接続を考えよう
- ・ ポスターセッションによって学び直しを喚起

受講者の感想

- ・ 授業研をより意義のあるものにするには、教師同士が学び合うことが一番大事であることがわかりました。
- ・ まず研究主任が手本を示すこと。先生方に新しい提案があるときは、まず率先して研究主任が実践することで他の先生方も「やってみよう！」になれると思いました。
- ・ 研究主任としてどう提案し、実践していけばよいのか1つ1つ確認しながら研修することができました。

